様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０３３９
研究課題名（和文）　ドイツ語の文法構造と意味機能の相対性・連続性に関する類型論的実証研究
研究課題名（英文）　Typological-empirical studies on grammatic constructions and semantic functions in German

研究代表者
小川　暁夫（OGAWA　AKIO）
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：００２０４０６６

研究成果の概要：
機能類型論の観点からドイツ語の文法構造と意味機能の相対性・連続性を解明することを目的に、研究代表者の小川、研究分担者の藤縄が具体的なテーマに取り組んだ。小川は、とりわけドイツ語の単文構造を形成する格（特に与格の意味機能）、態（ヴォイス、その中でも特に受動態と中間態の連続性）、また、人称構文と非人称構文の関連性を主語の出没を中心に考察した。藤縄は、複文構造、特に定形の補文と不定詞構造の相対性・連続性に関して研究するとともに、それと密接に関連する法（ムード、その中でも特に接続法）の意味機能の解明にも取り組んだ。両者は、ドイツ語におけるこれまでの膨大な研究成果に（批判的にも）依拠しながら、他のヨーロッパ諸語、また日本語を中心とするアジア諸語のデータも射程に取り込み、言語類型論・一般言語学的にも有効な経験的な仮説を提示することに努めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,400,000	0	1,400,000
２００７年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：ドイツ語学、言語類型論、統語論、語彙意味論、態、非定形動詞、格、人称性・非人称性

１．研究開始当初の背景

個別言語研究としてのドイツ語研究は、実証性に優れた、それ自体一貫した記述を必要とする一方で、自己充足に留まらず、言語類型論が目標とする、言語普遍性の発見と言語個別性の理由付けにも具体的・経験的に貢献しなければならない。また近年の言語類型論は、文法特徴のタイプ分け、同一・類似の言語現象の単なる突合せに終わらず、機能的・認知的観点からいわばカテゴリー横断的に人間言語の普遍性・個別性を見極めようとしている。そこではまた、それぞれの文法カテゴリー、文法構造が硬直的に独立しているのでは

なく、柔軟かつ有機的にカテゴリー間・構造間に相対性・連続性が仮定されている。本研究では、これらの研究動向を背景に、ドイツ語を中心にその主要な文法カテゴリー、文法構造を新たなパラダイムに捉え直すことを意図した。

２．研究の目的

前述の通り研究動向を背景に、本研究では、ドイツ語において根幹を成すと考えられる文法カテゴリー・構造を考察した。具体的には単文構造として、与格構文(Man reparierte mir das Auto: ’they repaired me-DATIVE the car’, Mir tut der Kopf weh: ’me-DATIVE hurts the head’)とその隣接構文(与格受動文：Ich bekam das Auto repariert: ’I got the car repaired’、主格主語文：Ich habe Kopfschmerzen: ’I have headache’)との関連、非人称構文（天候・気候述語、非人称受動構文、非人称中間構文など）の人称構文に対する位置付け、そして複合文構造として、埋め込み構造における句と節の分岐点(主としてzu不定詞とdass文の相補的および重複的分布)、文接続構造における等位と従属の境界（時間、条件、原因、逆接の接続関係）を研究対象とした。ドイツ語内部で隣接し合う文法構造とその意味機能の関係性を実証的に明らかにすることを通じて、より妥当性の高い機能類型論 Funktionale Typologie への基礎研究として資することを最終目的として掲げた。

３．研究の方法

対象とするドイツ語の文法構造の諸問題を単文の問題と複合文の問題に大別し、前者の問題として、(a) 非人称構文の人称構文に対する位置付け、および (b) 与格構文と隣接構文との関連を主に研究代表者の小川が、後者の問題として、(c) 埋め込み構造における句と節の分岐点、および (d) 文接続構造における等位と従属の境界を主に研究分担者の藤縄が担当した。
小川は、このような、Croft (2001) *Radical Construction Grammar* に通じる「連続体としての構文」という観点でドイツ語の非人称構文や与格構文を分析した。研究初年度の平成18年度は、ひとつには、上述の包括的アイデアを実質化するためのデータ収集・整理を行った。Ogawa (2003) *Dativ und Valenzerweiterung: Syntax, Semantik und Typologie* などで集めた当該ドイツ語構文に関するデータをコーパス（例えば Mannheimer Korpus）などで補足しながらデータベース化を進めるとともに、上述のヨーロッパ諸言語についても対応する事例との比較対照を図った。もうひとつの目標として、こうしたデータに基づき、基本的なアイデアの修正や精密化を進める。具体的には、関与するパラメータとそれらパラメータ間に成り立ち得る含意的普遍を作業仮説として提示し、検証・精密化に備えた。複合文構造は単文構造に比して解明が遅れているが、それでも Noonan (1985) Complementation のように、補文が通言語的に直説法とその他（接続法、不定詞、動名詞など）に大別されるとする先行研究がある。しかしながら、ドイツ語の dass 補文と（zu を伴う/伴わない）不定詞の分布は、多くの重複を許容し、極めて複雑な様相を呈している。藤縄は、含意の階層（implicative hierarchy）や文法化（grammaticalization）などいくつかの視点を言語普遍論者と共有しつつも、不定詞を主語の省略された文(節)としてではなく、句から節への拡張の流れの中で捉え直すことを目指した。これにより、句－節の相対性・連続性に機能論的・認知論的観点からも説明が与えられることが可能になった。

４．研究成果

機能類型論の観点からドイツ語の文法構造と意味機能の相対性・連続性を実証的に解明することを目標に、上述の役割分担を推進し、論文および口頭発表などで成果を公表した。
２００６年度、小川は４月、ベルリン自由大学に招待され非人称構文の言語比較について講演を行った。小川と藤縄は日本独文学会研究叢書『ドイツ語研究と言語類型論－共通の展望に向けて』に共に寄稿した。また、両者は２００６年９月に国際集会　『Terra grammatica 文法の領域』（ポーランド、ポズナニ大学）において同じく本研究課題に関するテーマで共に講演を行った。その成果もドイツにて刊行された。
２００７年度は、小川・藤縄両者が、ひとつには『ドイツ語を考える。ことばについての小論集』（東京、三修社）へ、態および補文について寄稿を行った。また、２００８年２月、国際集会『Deutsche Sprachwissenschaft in Italien イタリアにおけるドイツ言語学』（イタリア、ローマ大学）においても本研

究課題に直接関連するテーマで講演を行った。これらはイタリアでの刊行の採択が決定している。
２００８年度、小川はその成果を論文の形式でドイツや英国で公表した。また小川と藤縄は、アジア・ゲルマニスト会議２００８（金沢星稜大学）の際、小川が議長を務めた分科会「アジアとヨーロッパの言説」で共に口頭発表を行った。これは近くドイツにおいて刊行物となる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）

① Akio Ogawa, Das so genannte Expletivum in der Sekiguchi-Grammatik, K. Ezawa et al. (eds.) Sekiguchi-Grammatik heute. Tuebingen: Stauffenburg, 2009, 印刷中, 査読有

② Akio Ogawa, Zur Valenzerweiterung auf empirischer Grundlage, J.-M. Valentin (ed.) Akten des Germanisten Kongresses Paris. Frankfurt: Peter Lang, 4, 21-36, 2008, 査読有

③ Akio Ogawa, Case in a topic prominent language: syntactic and pragmatic functions of cases in Japanese, A. Malchukov/A. Spencer (eds.) Oxford Handbook of Case. Oxford: Oxford University Press, 769-788, 2008, 査読有

④ 小川暁夫,「事象の捉え方:態(ヴォイス)」三瓶裕文・成田節（編）『ドイツ語を考える』, 三修社, 103-110, 2008, 査読無

⑤ Akio Ogawa, Valenzalternation bei objekthaften Nominalen und damit vergleichbare Phänomene, B. MIkolajczyk & M. Kotin (eds.): Terra grammatica. Ideen-Methoden-Modelle, Frankfurt a.M.: Peter Lang, 299-308, 2008, 査読有

⑥ Akio Ogawa, Zum Phänomen der Valenzerweiterung auf empirischer Grundlage, J.-M. Valentin (ed.) Akten des XI Internationalen Germanistenkongresses Paris 2005 "Germanistik im Konflikt der Kulturen", Frankfurt a.M.: Peter Lang, Bang4, 27-36, 2008, 査読有

⑦ 藤縄康弘,「補文の統語論と意味論」三瓶裕文・成田節（編）『ドイツ語を考える』, 三修社, 181-190, 2008, 査読無

⑧ Yasuhiro Fujinawa, Valenzalternation bei infiniter Komplementation und damit vergleichbare Phänomene, B. Mikolajczyk & M. Kotin (eds.): Terra grammatica. Ideen-Methoden-Modelle, Frankfurt, a.M.: Peter Lang, 101-116, 2008, 査読有

⑨ 藤縄康弘,「ドイツ語の補文と不定詞補語－その統語論的・意味論的輪郭－」, 愛媛大学法文学部論集人文学科編, 23, 63-83, 2007, 査読無

⑩ 小川暁夫,「非人称構文の類型と機能－人称構文との連続性において」小川暁夫/岡本順治（編）『ドイツ語研究と言語類型論－共通の展望に向けて』日本独文学会研究叢書, 39, 66-77, 2006, 査読無

⑪ Akio Ogawa, Meteorological and chronological expressions in Japanese and some other languages, Studia Philologia Universitatis Babes-Bolyai ルーマニア, 12, 33-45, 2006, 査読有

⑫ Akio Ogawa, Wie fest sind die Rituale der "Fashions of Speaking"? Ein deutsch-japanischer Vergleich, Rituale des Verstehens, Verstehen der Rituale, Iudicium ドイツ, 166-176, 2006, 査読有

⑬ 藤縄康弘,「補文の類型論と現代ドイツ語の不定詞」小川暁夫/岡本順治（編）『ドイツ語研究と言語類型論－共通の展望に向けて』日本独文学会研究叢書, 39, 5-25, 2006, 査読無

⑭ Yasuhiro Fujinawa, Das hätte ich geschafft!-Zum grenzüberschreitenden Vorkommen von Konjunktiven mit realem Bezug im Gegenwartsdeutsch, Neue Beiträge zur Germanistik, Indicimu ドイツ, 5-3, 62-76, 2006, 査読有

〔学会発表〕（計８件）

① Akio Ogawa, Sprachwissenschaftliche Diskurse des Japanischen und des Deutschen, アジア・ゲルマニスト会議

２００８，2008.8.26，金沢星陵大学

②Yasuhiro Fujinawa, Sprache und Musik im Deutsch-Japanisch-Kontrast, アジア・ゲルマニスト会議２００８，2008.8.26，金沢星陵大学

③Akio Ogawa, (De-)Kausativierungsstrategien psychologischer Prädekate unter besonderer Berücksichtigung des Deutschen und des Japanischen, 3.Tagung "Deutsche Sprachwissenschaft in Italien"（第3回「イタリアにおけるドイツ語言語学」）,2008.2.14, Università Sapienza di Roma(ローマ大学) イタリア

④ Yasuhiro Fujinawa, (In-)Finitheit, unterspezifizierte Kasus und Argumentstruktur:sog.Partizipien Ⅱ im Perfekt und Passiv im Fokus, 3.Tagung "Deutsche Sprachwissenschaft in Italien"（第3回「イタリアにおけるドイツ言語学」）,2008.2.14, Università Sapienza di Roma(ローマ大学) イタリア

⑤Yasuhiro Fujinawa, (In-) Finitheit und Argumentstruktur:Sog.Partizipien Ⅱ im Perfekt und Passiv, 日本独文学会第３５回語学ゼミナール, 2007.8.30, コープイン京都

⑥Akio Ogawa, Impersonalia im Sprachvergleich. 招待講演 2007.4.24.(Freie Universitaet Berlin ベルリン自由大学) ドイツ

⑦ Akio Ogawa,Valenzalternation bei objekthaften Nominalen und damit vergleichbare Phänomene, "Terra grammatica 文法の領域" 2006.9.26, ポズナニ大学、ポーランド

⑧Yasuhiro Fujinawa,Valenzalternation bei infïniter Komplementation und damit vergleichbare Phänomene, 文法の領域" 2006.9.26, ポズナニ大学、ポーランド

６．研究組織

(1)研究代表者

小川　暁夫（OGAWA　AKIO）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：００２０４０６６

(2)研究分担者

藤縄　康弘（FUJINAWA　YASUHIRO）

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：６０２５３２９１

(3)連携研究者

なし